

Working Paper Summary

JICA-RI Working Paper No.94

(2015年3月刊行)

Embracing Human Security: New Directions of Japan's ODA for the 21st Century

Sachiko G. Kamidohzono, Oscar A. Gómez and Yoichi Mine

Research Project: [東アジアにおける人間の安全保障の実践](#)

■付加価値

1994年、国連開発計画（UNDP）による『人間開発報告書』で「人間の安全保障」が取り上げられて以降、同概念について様々な議論や研究が行われてきた。当初盛んだった概念や解釈をめぐる議論は今も続いている一方で、人間の安全保障委員会による最終報告書 Human Security Now（2003年）や2012年の国連総会決議などにより、その考え方には一定の国際的コンセンサスも形成されている。他方、それを実際に実現していくための現場での「実践」に係る議論や研究の蓄積はいまだ限られている。

本稿は、日本のODAの歴史を「人間の安全保障」の視点で振り返ることにより、こうした「実践」に関する蓄積の不足を埋める一助となることを試みたものである。とりわけ、ODA実施機関という立場で「人間の安全保障」を掲げている世界的にも稀有な存在でありながら、これまであまり注目されてこなかったJICAの取り組みに焦点を当て、一次資料からその歴史的変遷を分析することで、「人間の安全保障」を脅かす様々な問題に対処するための具体的実践のあり方について考察している。

■リサーチ・デザイン

本研究の研究課題は、①日本のODA、特にJICAによる二国間援助は、人間の安全保障上の脅威に対してどのような取り組みを行ってきたか、②今後、人間の安全保障のための実践をより一層進めていく上で特に重視すべき方向性は何か、という二点である。まず、政策レベルにおける日本のODAと人間の安全保障との関わりを先行研究に基づき概観した上で、①について自然災害、気候変動、感染症、暴力的紛争の4つを人間の安全保障を脅かす象徴的な課題として取り上げ、日本のODA、とりわけJICAによる二国間ベースの事業による取り組みの変遷を明らかにした。同分析にあたっては、主としてJICAの各種文書（政策文書、報告書等）や事業実績データベースから得られる情報を用い、補足的に各分野の事業実施に携わるJICA関係者へのインタビューを行った。その後、①の分析結果をふまえ、②について具体的方向性の提示を行った。

■主な結論（政策的含意を含む）

分析の結果、自然災害、気候変動、感染症、暴力的紛争という4種の脅威に対するJICAの実践は、脅威の性質による違いはあるものの、複数の共通する傾向も見られ、全体として「人間の安全保障」の考え方に合致する方向へ変遷・発展してきていることが確認された。他方、課題も引き続き存在しており、今後、人間の安全保障のさらなる実践化に向けて、特に重視して推進すべき3つの方向性が指摘できる。第一に、脅威が発生してからの対応だけでなく、まず予防を重視すること、第二に、脅威の発生に際しては切れ目なく（シームレス）包括的な支援を実現すること、第三に、伝統的な国家単位の開発度合にとらわれず、中進国も含めて最も脆弱な立場にある人々への支援を行うことである。